



TITLE:

アミール・キトブガーへの覚え書

AUTHOR(S):

佐藤, 次高

CITATION:

佐藤, 次高. アミール・キトブガーへの覚え書. 東洋史研究 1981, 39(4): 687-712

ISSUE DATE:

1981-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153803>

RIGHT:

アミール・キトブガーへの覚え書

佐藤次高

はじめに

一 史料の性格

二 「覚え書」の翻譯

三 註釋と檢討

むすび

はじめに

六七九年 Dhū al-Hijja 月一日(西曆一二八一年三月二十三日)、スルターン・カラーウーン Qalā'id (在位六七八／一二八〇—六八九／一二九〇)は全軍を率いてカイロを出發し、マルカブのホスピタル騎士團を討つべくシリアへ向った。エジプトには息子のサリーフ al-Malik al-Salih 'Alī を残し、その補佐役にアミール・サンジャル 'Alam al-Dīn Sanjar al-Shujā'i を任ずると共に、アミール・キトブガー Zayn al-Dīn Kibughā al-Manṣūrī を副スルターン (na'ib al-saltana) に起用した。⁽¹⁾そしてこの時、慣例にしたがって副スルターンに「覚え書」(tadhkira)を書き残し、帝國統治の方針を指示したという。これが、いわゆる「アミール・キトブガーへの覚え書」である。

この「覚え書」は、その全文が Ibn al-Furāt の年代記に伝えられ、また Qalqashandī の百科辭典にも、その一部が

缺けた形で残されている。すでに前稿でも指摘したように、マムルーク朝（一二五〇—一二七一年）はアイユーブ朝（一二五〇—一二五〇年）時代に成立したイクター制をそのまま踏襲して國家の基本制度としていたから、この條文は、イクターについても、その保有者や管理人のあり方を詳細に論じていてなかなか興味深い。しかも「覺え書」がスルターン・バイバルスの没後わずか三年で書かれたことを考えれば、そこにはバイバルス Baybars の治世（一二六〇—一二七一年）を含むマムルーク朝國家形成期の諸問題が集約的に表現されていることが豫想される。そこで本稿では、最初に「覺え書」の條文を翻譯し、次にこれらに對してできるだけ詳しい註釋を加えてみることにしたい。本論へ入る前に、まずこの條文の作成者や「覺え書」の性格を確かめておくことにしよう。

一 史料の性格

Ibn al-Furātによれば、この「覺え書」は、六七九—一二八一年、スルターン・カラウーンの命を受けて、裁判官のイブン・アルムカッラム Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. al-Mukarram al-Anṣārīが新任の副スルターンであるアミール・キトブガーに宛てて書いたものである。⁽⁴⁾ところがQalqashandīは、これをスルターン・サーリフが六九九年にアミール・キトブガーに託した「覺え書」であり、その起草者はAhmad b. al-Mukarram b. Abī al-Ḥasan al-Anṣārīであるとしている。⁽⁵⁾つまりIbn al-Furātはこれをカラウーンの「覺え書」（六七九年）とみなし、Qalqashandīはサーリフの「覺え書」（六九九年）として傳えていることになる。前述したQalqashandīの缺落部分を除けば、二つの「覺え書」の文章はほぼ一致するから、この二つが同一の「覺え書」であることはまず間違いないところであろう。とすれば、この二つの記事のうち、果してどちらが正しいのであろうか。また「覺え書」を起草したイブン・アルムカッラムとは一體どのような人物なのであろうか。これらの問題を検討するために、まず最初に「覺え書」の受取人であるアミール・キトブガーの経歴を調べてみることにしよう。

キトブガー *Zayn al-Dīn Kibughā al-Mansūrī al-Mughnī* は、そのニスバからも知れるようにモンゴル人 (*Mughul*) で、オイラート (*al-Uyratīya*) の出身であったといわれる。⁽⁶⁾ はじめフラグの軍中にあったが、六五八／一二六〇年末、シリアのヒムス總督によって捕えられ、ムスリム側の捕虜に加えられた。⁽⁷⁾ その後カラールーンによって買われ、次いでアミール位を授與されるとやがて昇進の道を歩みはじめ、六七九年にはカラールーンの副スルターン (*na'ib al-saltāna*) に拔擢された。⁽⁸⁾ またナーシール *al-Malik al-Nāsir* の最初のスルターン時代 (六九三／一二九四—一二九五) にも副スルターンを務め、六九四年、ナーシールが *Karak* に退くと、自らスルターンを宣して *al-Malik al-ʿAdil* と稱した。しかし彼の治世は *Lajin* や *Qarāsunqur* など有力なアミールたちの反對に會つて短命に終り、六九六／一二九七年にはダマスカスに逃亡、後に許されて *Hama* を與えられ、七〇二／一三〇二—一三〇三年にそこで没した。短軀で、皮膚は褐色、あごひげの短い軍人であったといふ。⁽⁹⁾

このような経歴から明らかなように、キトブガーが副スルターンの地位にあったのは、カラールーンの時代とナーシールの最初のスルターン時代とであった。したがって、六九九年にキトブガーが副スルターンに就任することはあり得なかつたのである。またそもそもサーリフは、カラールーンの王位繼承者 (*wali al-'ahd*) であったにもかかわらず、結局、スルターン位に昇ることなくその政治生命を終えた人物である。⁽¹⁰⁾ *Qalqashandī* はこれらの事實を混同し、年代も六七九年を六九九年と誤つて傳えたものと思われる。⁽¹¹⁾

次にこの「覺え書」を起草した *qāḍī Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. al-Mukarram b. Abī al-Ḥasan b. Aḥmad al-Anṣārī al-Katīb* について、人名辭典で時代の一致する同一人名を探すと、*Ibn Ḥajar* の *Durar* のなかで *qāḍī Jamāl al-Dīn Abū al-Faḍl Muḥammad b. Mukarram b. 'Alī b. Aḥmad al-Anṣārī al-Iṣṭiq al-Miṣrī* (六三〇／一二三三—七一一／一三一一) なる人物を見出すことができる。⁽¹²⁾ 彼はエジプトの文書廳 (*diwān al-inṣhā'*) に永年勤務し、その後裁判官 (*qāḍī*) として *Ṭarabulus* に赴任したというから、覺え書の起草者としてふさわしい條件を備えていたことに

なる。またこのことは、Ibn al-Furāt にある人名の最後に書記 (kātib) と記されていたこととも符合する。やうに Jamāl al-Dīn というラカブについても、Ibn al-Furāt の他の部分から、⁽¹³⁾「覚え書」の起草者がこれと同じラカブを持っていたことを確かめることができる。ただ Ibn al-Furāt はこの起草者のクンヤを Abu 'Abd Allāh と傳えるのに對して、*Durār* にある人物のクンヤが Abu al-Faḍl とされている點が氣になる。しかし Ibn al-Furāt の校訂者によると、寫本ではこのクンヤの部分は空白であるというから、⁽¹⁴⁾刊本に Abu 'Abd Allāh とあるのはあくまで校訂者の推測に過ぎない。したがってカーディーという職名、イスマ (本名)、ラカブ (尊稱)、ニスバ (由來名) がすべて一致するこの二人を同一人物に比定してはほほ間違いないであらう。そしてこの推定が正しいとすれば、Suyūṭī が傳えるように、⁽¹⁵⁾彼はわれわれにもなじみの深い『アラビア語辭典』(*Lisān al-Arab*) の著者、Ibn Manẓūr と同じことになる。

以上のことをまとめれば、「アミール・キトブガーへの覚え書」とは、六七九年ズー・ルヒッジャ月にスルターン・カローウーンの命を受けた文書廳の書記官イブン・マンズールが、新任の副スルターンであるキトブガーのために起草した文書であった。*Qalqashandī* によれば、一般に覚え書 (*tadhkira*) は、スルターンがエジプトを離れる時に、後に残る副スルターンに宛てて書かれるのが慣例 (*ʿada*) であり、それは「エジプト全土の安定策 (*masaliḥ*)、税の徴收と運搬、あるいは灌漑土手 (*jisr*) の建設など諸般にわたって政府の布告 (*al-marāsim al-sharīʿa*) を出す場合の基礎となるものであった」という。⁽¹⁶⁾ここで取りあげる「覚え書」もアミール・キトブガー宛ての形式をとってはいるが、その最後の條文には、「この覚え書は各ミシパルで読み上げられ」、「各人はその内容にしたがって行動する」と記されている。⁽¹⁷⁾これは、「覚え書」がキトブガーに對して政治の基本方針を指示すると共に、一般のムスリムに對しては政府の布告として公示されたことを意味している。以下で個々の條文を解釋する場合、「覚え書」のこのような二つの性格を念頭に入れておくことが肝要であると思う。

二 「覚え書」の翻譯

「アミール・キトブガーへの覚え書」は、全體で二十八條からなっている。ここでは、Subh を参照しながら、Ibn al-Furat の記事によってこれを翻譯してみることにしたい。原文ではそれぞれの條文は *fat'* (條) で分けられているが、便宜上これに通し番號をつけてみた。「前文」以下の「覚え書」は次の通りである。

善政 (*khayrat*) のための有用にして、完全なる覚え書 (*tadhkira*)。アミール・キトブガー——神が彼の力を永からしめんことを——の政府 (*al-majlis al-'ali*) は、これによって以下に説明するようなエジプトの重要問題 (*muhimmat*)、諸状態とその繁榮 (*masalih*)、秩序の維持、カイロとフスタートおよびエジプト全土における裁決をとり行なう。またこれにもとづいて、種々の案件、裁判や統治、税の徴收、警備や保安、⁽¹⁹⁾新改革にかんする政府の命令を發布する。

[1] 聖法 (*al-shar' al-sharif*)。これによる裁決や裁判はハーキム (*hakim*) やカーディー (*qadi*) が執行する。その執行とは、棄却 (*naqd*) し、裁可 (*ibram*) することである。

[2] 公正と正義と權利。これらは、貴顯 (*khassa*) や庶民 (*'amma*)、遠い者と近い者、不在者と存在者、到着する者と出發する者などすべての臣民 (*ra'aya*) を對象とするが故に、帝國全土の町やむら、諸地域や諸地方で遵守される〔べきである〕。彼〔キトブガー〕はこの輝かしい時代のためにすべての人々から訴え (*ad'ya*) を募り、これを検討する。公正 (*adi*) は神の證しであり、また善に至る道であつて、すべての惡から守り、すべての不正を排除する。

[3] 流血 (*dima'*)。これについては聖法の裁きにゆだねる。復讐 (*disas*) が必要な者は、その相手に引き渡して聖法ののつとめた復讐を行なう。また切斷刑 (*gat*) が必要な者も聖法にしたがつて切斷する。

[4] カイロやフスタート——神が兩都市を守り給うように——に固有な事。他人に傲慢な振舞いをしたり、⁽¹⁹⁾強者が弱者

に力を用いたり、また他人に對して決して敵對してはならない。

- [5] 彼は次のように命ずる。市中 (madīna) および郊外のフサイニーヤやワクフとして圍まれた土地 (al-ḥaṭṭa) を、夜、必要がないのに歩き回ってはならず、また、急を用ずることではなければ、家を出てはならない。〔特に〕女性⁽²⁰⁾は、夜、決して勝手な行動をしたり、出歩いたりしてはならない。

- [6] 牢獄 (hubūs)。その監視と警備は、夜も晝も行なわれる。十字軍騎士 (Fīranī) やアンティオキア人 (Anṭakīyūn)、その他すべての捕虜の髭 (liḥā al-asārā) はそられ、のびればまたこれが行なわれる。牢へ入る者、仕事に使われる捕虜、および彼らと一緒に出て行く者には注意が拂われる。捕虜と接するジャンダーリーヤ (jandārīya) には信頼のおける人物を當て、よそ者や疑わしい者を用いてはならない。仕事に使われている捕虜も牢獄以外で夜を過してはならないし、私的な用事、風呂、教會、娛樂 (furīa) のために外出してはならない。彼らの足枷 (qayūd) は調べて、いつでもしっかりとめておくべきである。Khizāna al-Bund 牢は、その内外、上下とも夜の警戒を二倍にし、Khizāna Shamā'il その他の牢獄⁽²¹⁾についても同様である。

- [7] 軍人 (jund) の一團を市内のバトロール (lawf) に任じて、横町 (zuqāq) の檢索や路地 (darb) の閉鎖に當らせる。また街區の夜警人 (asḥāb al-arbā) を點檢して、持ち場に居らず、そこを離れた者は處罰⁽²²⁾する。〔夜中〕路地は閉めたままにしておくが、フサイニーヤやアフカール、および市中のすべてにこのような指示が與えられる。これは遵守されるべきであり、命令に違反して夜中に許可 (iḍhr) なく歩く者がみつければ、その者は逮捕され、處罰されるであろう。

- [8] 諸門 (abwāb) の警備はもっとも嚴重にし、夜間やその開閉時には門の内外を點檢する。

- [9] 若者 (shabāb) や不逞の徒 (awlū al-da'ara) あるいは遊俠の徒 (man yata'ana al-'abātha wal-zanjarata) が集まる⁽²⁴⁾ところには、晝も夜も人が集まることは禁止される。權威を保ち、神聖さを高め、また不逞の徒や遊俠の徒を追い返すために、完全な打ち拂いを実施する。

[10] カイロとフスタートの周囲には、慣習にしたがってムジャッラド (muǧarrad) がおかれる。カラールファ地區、城塞のうしろ、バフル地區、⁽²³⁾ フサイニーヤの外側も同様である。これは一晩たりともおろそかにされず、ムジャッラドたちは、旅に出る場合か、完全に明るくなった時以外、その持ち場を離れてはならない。

[11] 木曜日の夜 (layali al-juma')、二つのカラールファ (Qaratān) には男や女が集まらないよう布告する。〔特に〕女性にはこれが禁止される。

[12] 軍役 (baykar) に就いていて不在な者の重要案件。彼らの物事や農業安定策 (masaliḥ) は、その代理となる者が處理する。⁽²⁴⁾ つまり彼らの取り分は、その代官 (nā'ib) や奴隸兵 (ghulām) や代理人 (wakīl) たちに委ねられる。自らの持ち分 (ḥisā) を所有する者はその權利を専らにし、彼らが權利があると考える一定の持ち分については干渉されず、したがってその所有權は強い。彼らのワキールたちに對しては、その取得分に證明書 (nujja) が書かれる。それは、戦場にいる委任者が、「私たちのワキールから、まだ私たちのために何も徴收していないという手紙が届きました」ということを言わせないためである。これは彼らの不満を封じる手段となるであろう。

[13] カイロとフスタートの運河 (khālīj)。その建設や開鑿、およびその完成は、⁽²⁵⁾ 誰にも被害が及ばず、それぞれがその任務を首尾よく果せるように、時宜を得て行なうように意を用いるべきである。

[14] カイロ郊外の灌漑土手 (jusr) は、その完成や擴張を急ぎ、⁽²⁶⁾ それらの建設と運河 (masarib) の開鑿に努力する。またそれを破壊から守ることに努め、ナイルの増水期まで完全な状態を保持する。われわれの命令は慣行から外れないようにし、遠近のジスルについて命令が發せられれば、すべての人間がその果すべき仕事を行ない、鋤 (jarrū) や犁 (muǧalqīlāt) を用いてこれに従事するものとする。

[15] 公共事業 (amal) と行政 (wīlāya) に⁽²⁷⁾ つづ。政府の命令書 (al-amthila al-sharifa al-sulṭāniya) を作成して、ジスルの建設、改修、擴張を行なう。また橋 (qanāṭir) や水路 (tura) を調べて、破壊されたものを建設し、弱い部

分は補修し、破損した水門を直し、ナイルの増水期に必要とされる各種の税を徴収する。これにかんする政府の布告は庇護なしに遵守され、その命令は實行に移される。そして鍬や犁の事もこの命令の發行にしたがつて行なわれる。²⁹ただ、各人は權威 (jah) によってではなく、サーリフ時代 (一二四〇—四八年) の慣習 (ʿada) にしたがってその義務を果す。地方總督 (wali) には、それを自ら實行し、代官 (musibidd) に委託しないようにさせる。どの地域 (jiha) についてであれ、その収入に不足や缺けた部分があれば、この事業 (ʿamal) を擔當したワリーは處刑され、その財産 (mal) も沒收される。つまり、これについてワリーには非常に厳しい措置がとられるのである。彼らは、命令通りにジスルが完成し、それに缺けたところはないこと、またその結果を恐れるところはなく、それは命令にしたがつて行なわれたことを自筆で書き記す。

[16] 地方總督 (wali) たちに通達して、ザーヒル時代 (一二六〇—七六年) と同様に警備人 (khaṭir) を配備することについての命令を出す。つまり、町 (balad) と町の間に警備人をおき、彼らはテント (bayt shaʿar) に住んで通行人を監視し、用事のない者を逮捕する。そして何人といえども、夜、旅をしたり、危険を冒したりしてはならないこと、³⁰つまり日の出から日の入りまでを除いて旅行はできないことを諸國に布告する。これは確實に守られるべきである。

[17] 國境 (thughur)。その重要性を考慮し、重要な事柄、諸狀態、國境の保持、捕虜の監視、肝要な物事への注意の喚起について、また商人たち (tujjar) がやって來て國境にぎわうように、³¹そして商人の心を獲得し、彼らと公正な取引 (muʿamala) をすることなどについて政府の命令書を發行する。商人には税の徴収や現金・現物の持ち込み、各種の倉庫 (khazāʾin) や荷物倉庫 (hawāʾij khāna) についての保證を與える。また彼らには海開き (infṭāḥ al-baḥr) と商人の來港、貨幣の流通、³²良好な狀態、そして物資が増大する時期などを示唆する。さらに商人は充分な商品を持って來港すべきこと、船舶税 (ḥuquq al-marakib) の納入を疏かにしないこと、またその額や量が減ったりせず、³³慣

習にしたがつてそれらをまとめて國庫へ納入すべきことを通告する。取引きや各種の衣類・商品の搬入について、それに言譯けはきかないことも通達される。それは、取引きが停滞したり、遅れたりすることがないようにするためである。男奴隸 (mamluk) や女奴隸 (jariya) 絹 (harir) 現金 (ayn) サテン (atlas) 銀塊 (al-fidda al-hajar) や金の延棒 (aqṣab al-dhahab) など、到着するすべてのものについて、徴税は慣行 (ʿada) にしたがって行なわれる。

[18] 各地の總督 (wali) には、各時期におけるそれぞれの地域や産物からの政府の取り分 (al-huquq al-diwanīya) の徴收を確實に行なわせる。またサトゥキビ (aqṣab) の監督や適當な時期におけるその壓搾、およびこれに關連するすべての事を一任する。つまり彼は、現金や現物の徴收、その運搬、耕作、取引き、支出のことからなる安定策 (maslaha) をとり行なう。ワリーたちを監督して收入の不足や減少がないようにし、また支拂いの拒否や横領をなくし、苛酷な取りたてやその時期を彼らの思うままにすることがないようにすべきである。

[19] 政府の地租 (al-kharāj al-diwanīya) は、これを守り、保持し、増大させる。政府の命令がなければ、その一部たりともこれを授與してはならない。しかじかの事についての命令の出たことが知られると、彼「ワリー」はこれについて信頼のおける返事をする。

[20] アミールたち (umaraʾ) バンフリー・マムルーク軍 (al-Baluriya) ハルカ騎士 (al-halqa) および軍人 (jund) の取り分。その地域や税目 (jihāt) は、彼らの代官 (naib) や代理人 (wakil) に任せられ、彼らが扱う穀物や現金その他のものについては證明 (shahada) が取られる。ワキールたちに不満は無用である。彼らのなかには戰場 (baykār) に居る者のところにやっつけて、この收入 (mādda) を削減しようとする者もあるが、彼らには猶豫の門が閉ざされる。

[21] 地方總督 (wali) や監査官 (nazir) や役人 (mustakhdam) に命じ、各むら (balad) の al-muqtaʿin al-aṣṭiya, muqtaʿ al-jiha およびその jiha が土地 (fin) で與えられた者や税 (harṣun) で與えられた者の收入明細書を作成⁶⁵する。

させる。それは、この年度 (al-sana al-jayshiya wal-jihatiya) におけるイクター保有者 (muqta') たちの状態や各人の収入を知るためである。ワリーたちには、これを一人として缺かしたり、怠ったりしてはならない。またアミールやムクターが戦場に居て不在であることを利用して、その代理人 (ワキール) たちに對して貪欲に振舞つてはならない。そしてムクターたちが、「収入の」遅れを理由に不満を述べるべきでないようにすべきであり、悪や不正があつてはならない。

[22] 地方のアラブ遊牧民 (Urban)。彼らの財産 (mawadd) は削減され、人質 (rahatin) がとられる。彼らには警戒を怠りなくし、地方のワリーやナーイブに手紙を書いて、ウルバーンは誰も劍や槍や武器を携帯してはならない旨を通告させる。そしてこれ (武器) をカイロで調達する餘地を残しておいてはならない。これに違反し、武器を帶びて諸國を旅する者は、それを沒收され、處罰される。

[23] 代理人 (wakil) たち。彼らはイクター保有者 (muqta') たちの財産を扱い、地主 (malik) がその私有地 (milik) を自由にするように、それを自由に行うということである。それ故、彼 (ワリー) は主人の財産を管理するすべてのワキールを調べ、それについての文書を作成して、これを政府に提出する。

[24] 各むら (day'a, balad, qarya) にある政府に固有な取り分 (al-huquq al-khaliṣa lil-diwan)。彼 (ワリー) はこのことを確かめ、むらのシャイフたち (mashaykh) を呼び出して、ここには政府収入が一定の量 (qist) や時期毎に何ディルハムあるか、また何アルデブあるかの證言をとる。使いを何度もやつたり、農民 (ra'iya) からこれを徴収するのに代官 (nushidd) を派遣するのは無用である。これは農民の負擔が二倍、つまり二ディルハムにならないようにするためである。その目的は農民の負擔を軽減することであり、取り分は不正なしに政府へ納められるべきである。

[25] ジャーンダール (jandar) がカイロ (Misr) から地方へ行った場合、一つの地域 (amat) で二ディルハム以上を彼に與えてはならない。そこにある取り分は、その權利保持者 (mustahiq) のものである。それ故、「ジャーンダー

ルが」それを取得すれば、いろいろ取り沙汰され、また不正や混亂のもとになるであらう。「二度」指定され、實行に移された取り分は、その所有者のものである。⁶⁷⁾あるジャーナールがやって来て、しかじかに振舞ったことは連絡され、その分だけ収入 (mawadd) を削減するための方策が示される。

[26] ある總督 (wali) が擔當地域内のむら (qarya) の取り分を徴收するために使い (rasul) を送った場合、旅行中のジャーナールに與えられるのは、一日二分の一デイルハム、つまり二日で一デイルハムである。どのジャーナールも、これ以上を取得すれば、彼は罰せられ、この地方から追放される。

[27] その主人のために官廳 (diwan) からであれ、農民 (fallahun) からであれ、現物 (mughall) ⁶⁸⁾ または現金 (jiha) を取得する代理人 (wakil) には證明書 (quja) が書かれる。そしてこの書類に證言 (shahada) がなければ、彼は何も引き渡されない。ワキールがその地域やイクター (qita) から取得するものについて、證明書が一通ディーワーンに残される。そうすれば、ある者が不満を述べた時には、われわれは行って、⁶⁹⁾取り分の遅れに不満を持っている者について彼らに教えることができるし、そのワキールのことや取得分についても調べることができる。彼に對する證言を調査書の折り目に入れて送り、また各ムクターが取得したものについての證言を文書にまとめる。そうすれば、われわれは證明書や證言の内容から、各むら、各地域からのムクターの収入 (mutahassil al-muqta) を一つ一つ、また各人の現金、および現物収入の全體、そして各人の収入の遅れをも知ることができる。こうして各むらやムクターの状態を知り、彼らの不満を取り除き、そして彼らの状態を明確に把握することが可能となる。

[28] この覚え書は、一條一條が各ミンバルで読みあげられる。遠い者も近い者もこれを聞き、存在する者も不在な者もこれを知る。各人はその内容にしたがって行動し、これに違反した者はわれわれの力や權威を知ることになるであらう。

三 註釋と検討

以上に翻譯した「覚え書」について、條文の順序にしたがって註釋を加え、そのうち特に重要と思われる問題については、少し詳しく検討してみることしよう。

前文は、この「覚え書」がエジプト行政の基本になることを示したものである。そのなかで「繁榮」と譯した *maslaha* の複數) は後の條文でもくり返し用いられるが、これは「災害」を意味する *fasad* と相對立する概念である。[18]には、その内容が「現金や現物の徴收、その運搬、耕作、取引、支出のこと」から成ると具體的に記されている。このことから明らかなように、マスラハとは單なる生活の繁榮を指したのではなく、行政の力によって耕作や取引が安定し、租税の徴收も圓滑に運ぶ状態を意味していた。Maqrizi は『エジプト社會救済の書』の冒頭で、支配者がマサーリフをおろそかにすれば、その結果として災害(ファサード)が増大すると述べている。⁽⁴⁰⁾ プワイフ朝時代のイラクでも、マスラハとは勸農(imara)、つまり水利機構を管理・維持し、農民に種子農料を支給することによって、農村の繁榮を維持することであるとされていた。⁽⁴¹⁾ したがってエジプトでもイラクでも、マスラハは社會の繁榮とそれを導くための施策を意味する用語として、ほぼ共通に用いられていたとみてよいであろう。

[1]から[3]は、法と正義の問題を扱う。[1]の *shar'* はもちろん *shari'a* と同義語でイスラム法を意味するが、これを運用するハーキム(hakim)とカーディー(qadi)とは一體どう違うのであろうか。確かなことは不明であるが、湯川武氏も指摘されるように、⁽⁴²⁾ ハーキムを下級法官、カーディーを上級法官と明確に區別できるかどうかいささか疑問である。Udluwiによれば、例えば'Abd Allah al-Isnā'i(七一九/一三一九年没)は Ikhmim のカーディーを務めた後に Ous' 地方は Afyū のハーキムに任せられた。⁽⁴³⁾ また'Abd al-'Aziz al-Uswānī(一五五四/一二五六年没)も、Uswān のカーディーであると同時にそのハーキムであったと伝えられる。⁽⁴⁴⁾ 二、三の例から簡単に結論を下すことはできないが、少く

とも現實には、カーディーもハーキムも共に裁判官の呼稱として用いられる場合があったことは確かである。〔3〕の *qisās* は、『コーラン』で保證された、殺人および傷害に對する復讐を意味する。例えば殺人に對する復讐であれば、近親者の訴えによってその罪が確定してからその私刑を實行に移すのが規定であった。⁽⁴⁵⁾ 次に記されている手足の切斷 (*qat*) が竊盜や追剝の罪に對するハッド刑であることは、ここで改めて説明するまでもないであろう。

〔4〕から〔14〕までは、〔11〕を除きすべてカイロとフスタートの都市を對象とする條文である。〔6〕にみえる *Khizāna al-Bund* は、ファティマ朝時代に建設された武器庫で、カイロ北東部のイード門からムルーヒーヤ通りに向つて右手のところに位置していた。ムスタンスィル *Mustansir* (在位四二七—一〇三六—四八七—一〇九四) 時代に火災を起してから牢獄として用いられるようになり、アイユーブ朝以降は、もっぱらシリアで捕虜とした十字軍兵士 (*Firanj*) の收容所として利用された。⁽⁴⁶⁾ 一方、*Khizāna Shamā'il* はズワイラ門の近くにあり、これは死刑 (*qat*) や切斷 (*qat*) 刑の執行される竊盜犯 (*sarrāq*) や追剝 (*qatīr al-tariq*) が收容される牢獄であつたといふ。⁽⁴⁷⁾ マムルーク朝時代のカイロには、これ以外に *Habs al-Ma'una*, *Habs al-Daylam*, *Habs al-Rahba wal-Jibb* の三年があり、フスタートには *Habs al-Ma'una*, *Habs al-Siyar* の二年がおかれていた。⁽⁴⁸⁾ これらの牢獄の管理者をジャンダール (*jandar*) と呼ぶが、これには百人長や四十人長が當てられ、牢獄の管理や死刑の執行ばかりでなく、宮廷奉仕のために到着したアミールをスルターンに取り次ぐのもその役目であつた。つまりジャンダールは常にスルターンの近くにあつて勤務するアミール職であつたから、マムルーク朝の半ば頃までは非常に重要な官職の一つとみなされていたのである。⁽⁴⁹⁾

〔7〕と〔8〕は市中の警備を指示した條文である。 *zugag* と *darb* はいずれも街區 (*hara*) を形成する小路であつて、例えばカイロの *Darb al-Atrak* は、*Hara al-Daylam* が區畫された時につくられた路地であつた。⁽⁵⁰⁾ ハーラの夜警人を *asjāb al-arba'* としうが、*arba'* (*arb*) の複數) も、元來、都市の街區を意味する用語であつた。I. M. ラビダスによれば、マムルーク朝時代のエジプト・シリアでは、都市の街區にまだ常設の門はつけられていなかったといふ。⁽⁵¹⁾ しかし〔7〕と〔8〕の

條文をみる限り、十三世紀末のカイロでは横町や路地にはすでに門 (ab) が設置され、夜間はこれを閉鎖する規定であったことは明らかである。ただ、これは外敵に對する防衛というより、〔5〕や〔9〕に示されている夜間の外出禁止令と同じく、むしろ市中における治安や秩序の維持をはかる措置であつたとみるべきであらう。

ashab al-arba' が市内の夜警人であるのに對して、〔10〕の mujarradin は市外の夜警を擔當した。Sulūkによると、六六二—一二六四年、外國使節を前にして軍人たちに賜品が下された時、これがエジプト・シリアの全軍であるかどうかとの問に對して、次のような返答が與えられたという。すなわち「これはエジプト軍だけであつて、Iskandariya, Dimyat, Rashid, Qus などの國境地帯に駐屯する軍隊、ムジャッラドーン、および自らのイクターに向つてゐる者を除いたものである」と。この記事によれば、ムジャッラドーンが少くともマムルーク朝の軍隊 (askar) を構成する正規の軍人であつたことは確かである。六九八—一二九九年にアレクソで没した五人のムジャッラドーン——amir Sayf al-Din al-Busfi, Ahmad Shāh, Muhammad b. Sungur al-Aqrā, 'Ayn al-Ghazal, Kaykaldi b. al-Sirrīya——をみて、これらがアミールやマムルークを含む軍人たちであつたことはほぼ間違いないところである。史料が少ないために詳しいことは分らないが、帝國內の各都市には、警備隊としておそらくかなりの數のムジャッラドーンが配置されてゐたであらう。

〔11〕に記されてゐる二つのカラーフア (Qarāfātān) とは、カイロとフスタートの間にあるカラーフアとこれに鄰接する城塞側の小カラーフアとを指す。Ibn Jubayr は、これを預言者たちやマホメット家の人々の廟墓がある靈驗あらたかなところであると述べ、Ibn Batūta もカイロ市民は木曜日の夜 (layla al-jum'a) になると、子供達を連れてこれらの聖廟を巡り歩くのが習慣であつたことを傳へてゐる。また Yaqūt によれば、カラーフアはフスタート市民の墓地で、そこには大きな建物や常設の市場があり、またカイロやフスタートの住民の行樂地 (nuzha) であると同時に、祭の時の遊興の地 (mutafarraja) ともあつた。Magrizi も、町の有力者 (ru'asa') が、夏の夜はカラーフアにあるモスクの中庭に腰を下

ろして月を見ながら雑談し、冬にはミンバルの下で寝るのが習慣であったから、一般の市民もカラファに行くのを好み、とりわけ「月見の晩」(al-layali al-muqamara)には飲物や甘菓子持参で多くの人々が集まった、と述べている。⁶⁷⁾したがって、條文にある「木曜日の夜」がこのような行樂をかねた「聖廟巡りの晩」、あるいは「月見の晩」を意味していることは明らかであろう。政府は治安を維持し、風俗を取り締まる目的で、カイロやフスタート市民の娛樂のための集會をも禁止したのである。これは「9」の若者や不逞の徒、あるいは遊俠の徒に對する集會の禁止とは、ほぼ同じ性格の規制措置であったと思われる。

「3」と「14」は、カイロ近郊の水利にかんする條文である。マムルーク朝時代には、カイロの西側城壁にそってカーヒラ運河(Khali al-Qahira)がはしり、⁶⁸⁾またその周邊には灌漑と防水をかねて幾つかの土手(jusr)が築かれていた。⁶⁹⁾ナイルが増水してローダ島のナイロメーターが十六ズイラーウ、つまり「スルタンの水」(ma' al-sultan)に達すると、スルターンあるいはその代理人がカーヒラ運河のダム(sadd)を開くのが慣しであった。この日、城塞ではアミールたちに賜品が下され、またカイロ市民もナイルが例年の約束を守ってくれたこと(wala' al-Nil)に感謝して、盛大な祭を催したといわれる。⁶⁰⁾

「15」の條文は、地方における水利の問題を扱う。これによれば、ジスル(灌漑土手)、橋、水路、あるいは水門などの建設や補修は、地方總督(wali)の責任で實行されたことになる。しかし、例えばジスルについてみると、エジプトでは古くから政府管理のジスル(al-jusr al-sulṭāniya)とむら管理のジスル(al-jusr al-baladiya)とに分れ、後者はムクターと農民によって管理されるのがたてまえであった。⁶¹⁾運河や水路についても、基本的にはこれと同様であったと思われるから、ワリーが擔當したのは、あくまで政府管理のジスルと運河であったにちがいない。ワリーは、ムクターと同様に、⁶²⁾自らの仕事を補佐する役人(mubashir)を抱えていたが、そのなかには代官(shaddあるいは mushidd)、徴税官(amil)、公證人(shahid)などが含まれていた。⁶³⁾ただ、水利機構の管理・維持はエジプトの死命を制する事業であったか

ら、條文にあるように、ワリーがこれを代官に委任することは禁止されたのである。

續く〔16〕と〔17〕の條文も、同じくワリーの任務についての規定である。〔16〕はバイバルス時代からの傳統にしたがつて警備人(khafir)を配備することを定めているが、ここで夜の旅を禁止しているのは、〔5〕や〔11〕で、夜、市中を歩き回ったり、集會に加わったりするのを禁止していることと符合する。また〔18〕でサトウキビ(qasab al-sukkar)の栽培・壓搾その他の事柄をワリーに一任しているのは、當時、サトウキビが政府の農場(awāsi)で栽培されることが多かったからであろう。⁶⁴ もっとも、十二・十三世紀へかけて下エジプトから上エジプトへかけて目覺しい勢いで普及していったサトウキビが、アワスィーなどのスルターン領以外でまったく栽培されなかったわけではない。アミールをはじめとするイクター保有者(mugia)も商品作物としてのサトウキビ栽培に熱心であったし、⁶⁵ 富裕な商人も砂糖の製造工場(maibakh al-sukkar)の建設に多額の投資を行なったと傳えられる。⁶⁶ すでにファティマ朝時代から、エジプトの砂糖はヨーロッパへ向けての重要な輸出品目に數えられていたのである。⁶⁷

〔24〕と〔26〕もワリーにかんする規定である。二つの條文はワリーによる租税の徴收方法とその場合の注意事項を書き記しているが、ここで「覺え書」にあらわれたワリーの任務をまとめてみれば、次のようになる。

- (1) 政府管理のジスル、運河、および水門の建設と補修〔15〕。
 - (2) 通行人や夜の旅人を監督するための警備人の配置〔16〕。
 - (3) 地租をはじめとする政府収入の確認と徴收〔18〕、〔19〕、〔24〕、〔26〕。
 - (4) サトウキビの栽培・壓搾その他の管理〔18〕。
 - (5) イクター保有者の収入證明書の作成〔21〕。
 - (6) イクター保有者の代理人(ワキール)にかんする調査と文書の作成〔23〕。
- ワリー(地方總督)の任務がこれですべて盡されているとは限らないが、(1)から(6)までの事項をみれば、エジプトに

における地方行政の擔い手であったワリーの性格をかなり具體的に理解することが可能であると思う。なお〔25〕と〔26〕には、徴税その他の目的で地方のむらに赴く *jandar* についての規定が記されている。このジャーन्दールは、むろん〔6〕にあらわれるアミール・ジャーन्दールとは異なり、*nushidd* などと同じく、ワリーが用いる下級の役人であったと推測される。

〔17〕は國境 (*thughur*) での通商問題を扱う。エジプトの國境地帯には、*Iskandariya*, *Dimyāt*, *Tinnis*, *Rashid*, *Aydhāb* などの諸港があり、マムルーク朝時代には、これらのうち *Iskandariya*, *Dimyāt*, *Rashid* の三港にマヘンツィア、ジェノア、ピサの領事館 (*qunsuliyā*) がおかれていた。⁶⁸ 條文は、通商活動を促進するための商人 (*tajir*) の取り扱い方や、彼らからの税の徴收について細かく規定している。ここで倉庫 (*khizāna*, *hawāj khānah*) というのは、外國商人が商品を保管すると同時に、滞在中の宿としても利用する *funduq* のことを指すと思われる。⁶⁹ 外國商品に對する課稅率は五分の一 (*khums*)、つまり二〇パーセントよりも低いこともあれば、三五パーセントとかなり高率の場合もあったらしい。⁷⁰ ちなみにムスリム商人から徴收されるザカートは、一般に二〇〇ディルハムにつき五ディルハムの稅率 (二・五パーセント) と定められていた。⁷¹

さて少し前に戻ると、〔12〕は軍人の取り分 (*fuqūq*) について述べた條文である。*baykār* (複數は *bayākīr*) は、農民の賦役を意味するペルシア語の *bīgar* に由來するが、マムルーク朝時代のエジプトではもっぱら軍役あるいは戰鬪の意味に用いられた。⁷² イクター制成立以後のアラブ社會では、大アミールあるいはスルターンへの軍事奉仕はヒドマ (*khidma*) の語であらわされるのが普通である。しかし例えば「軍役の期間 (*mudda al-baykār*) が長びき、兵士たちは戰鬪 (*qital*) の多いのにいら立っていた」という *Sulūk* の記事のように、*baykār* の用例も年代記のなかに散見する。⁷⁴ 軍役はイクター保伴に伴う軍人の義務であるが、條文は軍人の權利の基礎となる持ち分を *jīha* と表現している。A・N・ポリアクによれば、*jīha* はイクター授與文書 (*manshūr*) に記された村落そのものを意味することもあるが、地租や關稅のような稅收

入を指すこともあったという。確かに Ibn Mammātī には *jihā* の内容として救貧税 (*zakāt*)、人頭税 (*jawālī*)、五分の一税 (*khums*) などの税目が列擧されている⁽⁷⁶⁾、また Nuwayrī には徴税官の擔當する「地域」あるいは「地區」としての *jihā* の用例がみえる⁽⁷⁷⁾。[21]の條文も土地 (*tin*) としての *jihā* と税 (*marṣūm*) としての *jihā* を區別しているから、當時はこのような用法が一般的であったとみてよいであろう。[12]によれば、このような軍人の取り分はその代理人である *nāṭib* や *ghulām* や *wakīl* によって管理され、彼らが取得した分については證明書 (*ḥujja*) を作成するのがたてまえであった。この證明書の作成は[20]や[21]の條文でもくり返し述べられている。しかも[27]によれば、この證明書には必ず證言 (*shahāda*) が必要であったという。政府が、前述したワリーを通じて、このような規定をどの程度實行に移すことができたかは疑問である。しかしここに、軍人のイクター保有を管理・統制しようとする政府の積極的な意圖を読みとることは充分に可能であると思う。

[26]は、イクター保有者 (*mugīa*) である軍人が、具體的には *amir*, *al-mamālīk al-bahriya*, *al-halqa* をよび *jund* から成っていたことを記している。*al-mamālīk al-bahriya* はもちろんスルターン・サーリフが編成したマムルーク軍であり、*al-halqa* はマムルークの子供 (*awlād al-nās*) や自由身分のクルドあるいはトルクマーンなどから成る非マムルーク騎士團である。⁽⁷⁸⁾ それでは次の *jund* とはどのような軍人を指したのであろうか。H・A・R・ギブによれば、サラディン時代(一二六九—一九三年)の *ajnad* (*jund* の複數)には、(1)正規軍を含む軍人、(2)一地域の全軍勢力、(3)地方の歩兵という三種の用法があった。⁽⁷⁹⁾ 一方、Qalqashandī は「マムルーク朝時代の *ajnad* には二つの階層 (*tabaqa*) があり、一つはスルターンのマムルーク (*al-mamālīk al-sulṭāniya*)、一つはイルカ騎士 (*ajnad al-halqa*) であったと述べている。⁽⁸⁰⁾ しかしこれ以外にも、アミールの保持するマムルークが *jund* と呼ばれることがあり、またアラブ遊牧民 (*ʿUrban*) も補助軍として *jund* に含まれる場合があった。⁽⁸¹⁾ これらのことを考え合せてみると、マムルーク朝時代の *jund* には、(1) *jund al-halqa* (2) *jund al-amir* (3) *ʿUrban* (4) *mamlūk al-sulṭān* を含む軍人一般、などのさまざまな用法のあったことが

分る。この整理にしたがっていえば、條文にある *jund* は(2)と(3)を中心とする軍人であつたろうと思われる。

〔21〕の條文はなかなか解釋が難しい。冒頭の文章は「ムクター(イクター保有者)を分類して『*al-muqta'in al-ašīya*, *muqta' al-jiha* およびその *jiha* が土地 (*tin*) で與えられた者や税 (*marsum*) で與えられた者」と記している。このうち「*muqta' al-jiha* および」の部分は、明らかに「*muqta' al-jiha* じまり」と解釋しなければ文意が通じない。おそらくこれは「*muqta' al-jiha* には一部の土地を授與されたムクターと、税收入を授與されたムクターとの二種があつたことを説明したのであらう。それでは最初の *al-muqta' al-ašī* とこの *muqta' al-jiha* とはどのように違ふのであらうか。少くとも私の調べた限りでは、他の史料に *al-muqta' al-ašī* の用例は見當らないので、その正確な意味はなかなかつきとめにくい。ただ、ファイユーム地方にかんする *Nabulusi* の調査記録をみると、そのなかにこれと關係しそうな *al-* の語を見出すことが出来る。ウドワ村を例にとつて考えてみよう。このむらの税收入は次のような種目から成つていた。

現金 ('ayn) $(289 + \frac{1}{3} + \frac{1}{8})$ dinār

㊸ māl al-hilālī 28 dinār

㊹ kharāj al-rātīb $(215 + \frac{1}{6} + \frac{1}{8})$ dinār
al-ašī 181 dinār

$\left\{ \begin{array}{l} \text{al-}iḍāfa \\ zā'id \text{ al-}qat'ā \end{array} \right. \begin{array}{l} (22 + \frac{2}{3}) \text{ dinār} \\ (11 + \frac{1}{4} + \frac{1}{8}) \text{ dinār} \end{array}$

㊺ kharāj fudun al-zirā'a $(4 + \frac{5}{24})$ dinār

$\left\{ \begin{array}{l} \text{al-}ašī \\ iḍāfa \end{array} \right. \begin{array}{l} (3 + \frac{1}{2} + \frac{1}{4}) \text{ dinār} \\ (\frac{1}{3} + \frac{1}{8}) \text{ dinār} \end{array}$

① *mushatara al-naqāt* $(37 + \frac{1}{16})$ dinār

② *qurī* $(2 + \frac{1}{6} + \frac{1}{48})$ dinār

現物 (*ghalla*) …… $(1907 + \frac{1}{6})$ ardabb

現金のうが ③ *kharāj al-rāiib* (俸給の地租) と ④ *kharāj fudun al-zirā'a* (耕作地の地租) がどのような基準に
もとづいて區別されているのかは不明である。しかし ⑤ と ⑥ はいずれも基本税 (*asīl*) と附加税 (*iqāfa' za'id al-qatī'a*) に
分けて記されている。現物についてこのような區別はないが、*al-muqta' al-asīl* を基本税の徴收權を持つムクター、*mu-*
qta' al-jiha を *māl al-hilālī* (大陰暦にもとづく税) や附加税などの徴收權を持つムクターと考えることもあながち不可
能ではないであろう。これはあくまで推測に過ぎないが、一つの假説として提示しておきたいと思う。

[21] の條文は續いてこれらのムクターの收入明細書を *jayshiya* と *jihatiya* の年度ごとに作成すべきことを規定してい
る。しかし一般には、地租 (*kharāj*) を徴收する太陽暦の年度を *al-sana al-shamsiya* あるうは *al-sana al-kharājiya* と
いひ、人頭税 (*jawālī*) やサダカ (*sadaqa*) を徴收する太陰暦の年度を *al-sana al-qamariya* あるうは *al-sana al-hilālīya*
と呼ぶのが普通である。條文にある *al-sana al-jayshiya* と *al-sana al-jihātīya* がそれぞれ *al-sana al-kharājiya* と *al-*
sana al-hilālīya に相當するとは斷定できないが、もしこれが正しいとすれば、*muqta' al-jiha* の收入は太陰暦にもとづ
いて徴收される税が中心であったことになる。そしてこれは、前述した *al-muqta' al-asīl* と *muqta' al-jiha* につづいて
推測の結果とも一致する。ただこの問題については、實際の用例を集めて、さらに検討を加えることが必要であろう。

む す び

はじめに記したように、ここで検討した「アミール・キトブガーへの覚え書」は、エジプトを留守にするスルターン
が、代理の主權者である副スルターンに帝國統治の方針を指示したものである。全二十八條は法と正義の問題に始まり、

カイロやフスタートの治安と風俗、運河の開鑿や灌漑土手の建設・補修などの治水対策、地方總督（ワリー）の任務、商業活動の保護と統制、ムクターとその代理人の問題、アラブの遊牧民（ウルバーン）対策など、マムルーク朝の國家と社會に係る多くの問題について規定している。これらはむろん雑多な條文の寄せ集めではなく、政府が重視する諸問題がここに集約されていることを認識することによって、われわれは初期マムルーク朝國家の性格を探る手掛りを得ることができるはずである。

イクターの問題に限ってみても、「覺え書」は幾つかの新しい知見を與えてくれる。例えばワリーは水利機構を管理・維持するばかりでなく、ムクターの取得分について證明書を作成し、これをディーワーンに保管しておく義務があった。またムクターには *al-muqta' al-asi* と *muqta' al-jiha* の區別があり、後者は土地を授與される場合と稅收入を授與される場合があった。これらはいずれも從來のイクター制研究では知られていなかった事實である。

もちろん「覺え書」は政策の基本を示したものであるから、ここに記された規定がすべて實行に移されたと考えることはできない。しかしそれらの規定のなかに、初期マムルーク朝時代の現實がさまざまに反映していることもまた事實であろう。前述したムクターの分類についても、軍人の取り分權は在地の租稅體系と結びついてかなり複雑であったらしいことをうかがわせる。マムルーク朝國家の構造に重要な變革をもたらしたナースィル檢地（一三一二—一三五五年）は、まさにこの點の改革を主要な目的にして實施されたのである。

註

- (1) *Ibn al-Furāt*, VII, 195—196; *Sulūk*, I, 684.
- (2) *Ibn al-Furāt*, VII, 196—200; *Subh*, XIII, 91—98.
- (3) 佐藤次高「*rawk* 論序説—フサーム檢地の場合—」（『西南アジア研究』十八號、一九六七年）、「マムルーク朝におけるイクター制の展開—ナースィル檢地の分析を中心にして—」（『史學

雜誌』第七八篇一號、一九六九年）。なお、新しい史料を加えて、この論文を全面的に増補・改訂したのが、T. SATO, *The Evolution of the Iqta' System under the Mamluks (Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No. 37, 1979)* である。

- (4) *Ibn al-Furāt*, VII, 196.
- (5) *Šubh*, XIII, 91.
- (6) *Khifāt*, II, 22—23. 六九四—二二九五年、タルガイ Farghay にトホチそ三〇〇のオイラートがカイロに來住し、スルターン・キトブガーはこれらの同族を厚遇したが、これもフイーハたからの反撥を招く原因であった。なお彼らの住居は、ナスル門外の Hara al-Husayniya にあつた (cf. *Khifāt*, II, 22° cf. J. Surūr, *Dawla Banī Qalawūn fi Miṣr* (al-Qāhira, 1947) pp. 36—37.
- (7) キトブガーの經歷については、*Kutub* (II, 282—283) と *Durrar* (III, 348—350) に詳しい。*Durrar* は、キトブガーが捕虜になった年を六四八年としているが、これはやはりフイン・ジャールートの戦いの後の六五八年とするのが正しいと思われる。
- (8) *Sulak*, I, 681.
- (9) *Kutub*, II, 283; *Durrar*, III, 350; *Shadharrāt*, VI, 5.
- (10) *Ibn al-Furāt*, VII, 195. マムルーク朝を通じてスルターンは選舉によつて選ばれたが、しかしその方法は形式化されず、選舉人も規定されなかった。カラウーンのように息子を王位繼承者 (wali al-ahd) に指名することもあるが、これは必ずしも有効に機能しなかったようである。cf. P. M. Holt, *The Position and Power of the Mamluk Sultan (BSOAS, vol. 38, 1975) pp. 237—240.*
- (11) ラブュータと Qalqashandi は六七九年を七九九年と誤って傳えていると指摘しているが、Qalqashandi が述べてのは七九

九年ではなく、六九九年である (H. Rabie, *The Financial System of Egypt*, London, 1972, p. 66, n. 1°).

- (12) *Durrar*, V, 31—33. cf. *Kutub*, II, 524; *Safadi*, V, 54—57; *Shadharrāt*, VI, 26; *Husn*, I, 388, 534; *Miṣrāt al-Janan*, IV, 251.
- (13) *Ibn al-Furāt*, VII, 247.
- (14) *Ibn al-Furāt*, VII, 196, n(2); 202, n(1).
- (15) *Bughya*, 106—107.
- (16) *Šubh*, XIII, 91.
- (17) *Ibn al-Furāt*, VII, 200; *Šubh*, XIII, 98.
- (18) *Šubh* にて hafirhā wa-hifhā wa-ḥafirhā (XIII, 91) は hafir は明かなく khafir である者として khafir の誤であるとされる。
- (19) *Ibn al-Furāt* にて「ある者はある者として歸して」とあるが、*Šubh* にて「ある者として歸して」(alā aḥdin) が脱落している (XIII, 92°).
- (20) Husayniya とカヘロの北門 (Bāb al-Naṣr) の外側にある郊外の呼稱で、盛時には七〇〇〇人餘りが住むようになった。Hara al-Husayniya の位置については (*Khifāt*, II, 20—23. cf. W. Popper, *Egypt and Syria under the Circassian Sultans*, University of California Publications in Semitic Philology, vol. 15, Berkeley and Los Angeles, 1955, map. 9°) akār (hakar の複數) は「元來は一定地域に對する賃料 (ujra) を意味したが、スルターン・ナーセールの頃からフミンと改称するようになった」とする (M. M. Amīn, *al-Awqaf wal-Hayāt al-Ijtima'iyya fi Miṣr*, al-Qāhira, 1980, p. 95°).

なおマクリズミーは、これを「エジプト人が某々の *hakar* と云えば、それは彼以外の者がそこに建物を建てるのを禁止する土地である」と説明している (*Khiat*, II, 114, cf. *Khiat*, I, 110; *Sulak*, II, 518)。

㉔ *Subh* は「半歳」ではなく「軍人」(*juyush*) とあるが、その校訂の誤りである (XIII, 93)。

㉕ *Subh* は *tuwawf* とあるが、*iawf* と意味は同じである (XIII, 93)。

㉖ *Subh* は「特、時を離さぬ」(*qaswini*) の語が創縁であると。

㉗ *Subh* は「晴ら」(*ghayy*) とあるが (XIII, 93) 上の條文の主語を考えれば「不雨」(*baghy*) の方が自然である。

㉘ カラーフ (*Qarafa*) はカイロコンスターンの間の地図である、バハ (*Bah*) 地図はナイル河とシロエの両側の城壁とある地域を有す (*W. Popper, Egypt and Syria*, map. 6)。なおカラーフといふは *Yaqut*, IV, 317 を参照。

㉙ 「その代理となる者が處理する」(*yaluuz wa-yashudd man yawlhim*) の部分で、*Subh* は「重要案件が」考慮すべき彼の代理人が處理する (*tulhaz wa-yashudd min nuwā-bhim*) とある (XIII, 94)。この前後の關係は *Ibn al-Furat* によつて離田した。

㊦ *Subh* は「渡す田」(*yaltammu*) ではなく「命ずる」(*yursamu*) と誤用されている (XIII, 94)。

㊧ *Subh* は「その事」(*amruhā*) とある (XIII, 94)。

㊨ 「これ」から「行なわれる」及びの文章で、*Subh* は「彼

落している。

㉔ *Ibn al-Furat* は「深く入り込む」(*yagharu*) とあるが (VII, 198) 上の意味であるから *Subh* の「危険を被る」(*yugharrir*) である。

㉕ *Subh* は「それと離れて」(*alayhā*) とある (XIII, 96)。

㉖ 「貨幣の流通」(*tariyya al-amwāl*) が *Subh* は *tazjiya al-amwāl* と表記しているが、意味は上の二は變ひなく。

㉗ *Ibn al-Furat* は「結果を被るもの」(*lā yafadhiak*) とある (VII, 198) 上の *Subh* によつて「減つた」(*lā yugallil*) と離れては (*Subh*, XIII, 96)。

㉘ *Subh* は「彼の田」(*amwālahum*) とあるが、これは文意不明である (XIII, 97)。

㉙ 「收入」が *Ibn al-Furat* は *mā ḥuṣila* とある (VIII, 199) *Subh* は *mā tahassala* とある (XIII, 97) 意味は上の二は同じである。

㉚ *Subh* は [㉔] 及び [㉗] の全三條が、そのへり脱落している。

㉛ *Ibn al-Furat* は「指定する」實にに移された取り分はその所有者のものと (*yusam 'alayhi wa-yusayyar wa-yasir al-ḥaq ma' sāḥibihā*) とあるが、*Subh* は「田」指定するのではなく、その権利は所有者のものである (*yusam 'alayhi wa-yusayyar al-ḥaq ma' sāḥibih*) とある (*Subh*, XIII, 97)。

㉜ *Ibn al-Furat* は「その田」(*lā'ihī*) とある (VII, 200) *Subh* は「その穀物」(*mughallihī*) とある (XIII, 98)。

- 289—290)° 『大分県史』第1巻の『大分県史』S. A. Ashur, *al-Mujama' al-Misrī*, pp. 197—200 に詳述す。
- (9) 佐藤次高「十二—十四世紀のヨシノと農村社会と農民」(『東洋文化研究所紀要』第五十九號、昭和四十八年)八九—九二頁。
- (10) *Nuweyri*, VIII, 298; *Mutid*, 41—42; H. Rabie, *The Financial System of Egypt* (London, 1972) pp. 66—67.
- (11) *Subh*, III, 458, 460.
- (12) 榎澤武雄「十一—十四世紀のヨシノと農村社会と農民」や〇一—十三頁。
- (13) 榎澤武雄「大分—大分県」。
- (14) S. D. Goitein, *A Mediterranean Society*, vol. I (Berkeley and Los Angeles, 1967) pp. 126, 264.
- (15) *ibid.*, pp. 126, 154.
- (16) J. Surūr, *Dawla Banī Qalāwun fī Miṣr*, pp. 339—340.
- (17) S. Y. Labīb, *Handelsgeschichte Ägyptens im Spätmittelalter* (Wiesbaden, 1965) SS. 211—212; I. M. Lapidus, *Muslim Cities*, p. 42.
- (18) *Ibn Mammātī*, 325—326; *Subh*, III, 459; S. Y. Labīb, *Handelsgeschichte*, SS. 199 f.
- (19) *Subh*, III, 457; S. D. Goitein, *A Mediterranean Society*, vol. I, pp. 270—271.
- (20) A. N. Poliak, The Influence of Chingiz Khān's Yāsa upon the General Organization of the Mamluḳ State (*BSOAS*, vol. X, 1942) p. 869; A. K. S. Lambton, *Landlord and Peasant in Persia* (London, 1953) p. 424; R. Dozy, *Supplément aux Dictionnaires Arabes* (2 tomes, Leiden, 3rd ed., 1967) p. 136.
- (21) *Suluk*, I, 105.
- (22) *Suluk*, I, 536.
- (23) A. N. Poliak, Les révoltes populaires en Égypte à l'époque des Mamelouks (*REL*, tome 8, 1934) p. 258.
- (24) *Ibn Mammātī*, 308—329.
- (25) *Nuweyri*, VIII, 217, 247.
- (26) D. Ayalon, Studies on the Structure—II, pp. 448, 459; R. Irwin, Iqta' and the end of the Crusader States (P. M. Holt ed., *The Eastern Mediterranean Lands in the Period of the Crusades*, Warminster, 1977) p. 71. 又このコントローヴェツトーン朝の事變はマムルーク朝の事變との關係を以てした體文のなるが、マムルーク朝のコンカ軍はマムルーク朝のコンカ軍と同様の事をなして、マムルーク朝のコンカ軍はマムルーク朝の中心に再編成されたものである(Re. S. Humphreys, The Emergence of the Mamluḳ Army, *Studia Islamica*, 45—46, 1977, p. 163)°
- (27) H. A. R. Gibb, The Armies of Saladin (*Studies on the Civilization of Islam*, London, 1962) p. 83.
- (28) *Subh*, IV, 15—16.
- (29) *Subh*, III, 454; D. Ayalon, Studies on the Structure—

- (*BSOAS*, vol. X, 1942) p. 869; A. K. S. Lambton, *Landlord and Peasant in Persia* (London, 1953) p. 424; R. Dozy, *Supplément aux Dictionnaires Arabes* (2 tomes, Leiden, 3rd ed., 1967) p. 136.
- ② *Sulak*, I, 105.
- ③ *Sulak*, I, 536.
- ④ A. N. Poliak, Les révoltes populaires en Égypte à l'époque des Mamelouks (*REL*, tome 8, 1934) p. 258.
- ⑤ *Ben Mammātī*, 308—329.
- ⑥ *Nuwayrī*, VIII, 217, 247.
- ⑦ D. Ayalon, Studies on the Structure—II, pp. 448, 459; R. Irwin, Iqīṭ and the end of the Crusader States (P. M. Holt ed., *The Eastern Mediterranean Lands in the Period of the Crusades*, Warminster, 1977) p. 71. R. S. トンフリーズはアイヤーブ朝の軍隊とマムルーク朝の軍隊との關係を取りあげた論文のなかで、アイヤーブ朝のハルカ軍とマムルーク朝のハルカ軍を同一視する考えを否定し、マムルーク朝のハルカ軍はインバルスにまつてシリフ軍を中心と再編成をなしたのであると述べている (R. S. Humphreys, The Emergence of the Mamluk Army, *Studia Islamica*, 45—46, 1977, p. 163)°
- ⑧ H. A. R. Gibb, The Armies of Saladin (*Studies on the Civilization of Islam*, London, 1962) p. 83.
- ⑨ *Subhī*, IV, 15—16.
- ⑩ *Subhī*, III, 454; D. Ayalon, Studies on the Structure—

II, p. 459.

⑧ *T'arikh al-Fayyūm*, 32—34. cf. Cl. Cahen, *Maḥẓa-miyyat* (Leiden, 1977) pp. 202—203.

⑨ *Šubḥ*, XIII, 54, 60, 69, 71.

⑩ T. Sato, *The Evolution of the Iqtā' System*, pp. 107—124.

〈引用書〉

Bughya; Jalāl al-Dīn al-Suyūṭī: *Bughya al-Wu'a' fi Ṭabaqāt al-Lughawīn wal-Nahḥ*, al-Qāhira, 1326H.

Durar; Ibn Ḥajar al-'Asqalanī: *Durar al-Kāminā*, 5 vols., al-Qāhira, 1966—67.

Ḥusn; Jalāl al-Dīn al-Suyūṭī: *Ḥusn al-Muḥādḍara fi T'arikh Miṣr wal-Qāhira*, 2 vols., al-Qāhira, 1967—68.

Ibn Baṭṭiḥa; Abū 'Abd Allāh Ibn Baṭṭiḥa: *Tuhfa al-Nuẓẓār fi Ḥarā'ib al-Amsār*, 4 vols., Paris, 1854.

Ibn al-Furāt; Nāṣir al-Dīn Ibn al-Furāt: *T'arikh al-Dawal wal-Mulūk*, VII—IX, Bayrūt, 1936—42.

Ibn Jubayr; Ibn Jubayr al-Andalusī: *Rihla Ibn Jubayr*, Bayrūt, 1964.

Ibn Mammāṭī; al-'Asad b. Mammāṭī: *Qawānīn al-Dawā-wīn*, Iskandarīya, 1943.

Ighathā; Taqī al-Dīn Aḥmad al-Maqrīzī: *Ighathā al-Umma bi-Kashf al-Ghummā*, al-Qāhira, 1940.

Khiṭāt; Taqī al-Dīn Aḥmad al-Maqrīzī: *Kitāb al-Mawā'iz wal-I'tibār*, 2 vols., Būlāq, 1270H.

Kutub; Ibn Shakīr al-Kutubī: *Fawāt al-Wafayāt*, 2 vols., al-Qāhira, 1951.

Mir'āt al-Jannān; Abū Muḥammad al-Yāfi': *Mir'āt al-Jannān*, 4 vols., Bayrūt, 1970.

Mufarrij; Muḥammad Ibn Wāṣil: *Mufarrij al-Kurūb fi Akḥbar Banī Ayyūb*, Bibliothèque Nationale, MS. Arabe, 1702.

Mu'id; 'Abd al-Wahhab al-Subkī: *Mu'id al-Ni'am wa-Mubīd al-Nigām*, al-Qāhira, 1948.

Nuwayyri; Ibn 'Abd al-Wahhab al-Nuwayyri: *Nihāya al-Arab fi Funūn al-Adab*, vols. 1—21, al-Qāhira, 1954—76.

Ṣafadi; Ṣalāḥ al-Dīn al-Ṣafadi: *al-Wāfi bil-Wafayāt*, vols. 1—4, Tehrān, 1961; vols. 5—7, Bayrūt, 1969—70.

Shadharāt; Ibn al-'Imād al-Ḥanbalī: *Shadharāt al-Dhahab*, 8 vols., Bayrūt, n. d.

Šubḥ; Abū al-'Abbās al-Qalqashandī: *Šubḥ al-A'šā fi Sinā'a al-Inṣā'*, 14 vols., al-Qāhira, 1963.

Sulūk; Taqī al-Dīn Aḥmad al-Maqrīzī: *Kitāb al-Sulūk li-Ma'rifa Dawal al-Mulūk*, 4 vols., al-Qāhira, 1939—73.

T'arikh al-Fayyūm; 'Uḥmān al-Nābulusī: *T'arikh al-Fayyūm*, al-Qāhira, 1898.

Ud-fuwā'; Abū al-Faḍl al-Ud-fuwā': *al-Ṭalī' al-Sa'id*, al-Qāhira, 1914.

Yāqūt; Shihāb al-Dīn Yāqūt al-Ḥamawī: *Mu'jam al-Buldan*, 5 vols., Bayrūt, 1955—57.

the Tung-lin, the "*Tung-lin hsüeh-an*" 東林學案. Also, his son Ch'ien Ch'un 錢春 conducted his political activities from the standpoint of the Tung-lin faction. Therefore this book is an indispensable work for the study of political history, being a history of the Wan-li period seen from the side of the Tung-lin faction. However, as for instance the chapter on Wan-li 43 (1615) is placed between the 28th and the 32nd year (resp. 1600 and 1604), one has to be careful when using it.

In the "*Wan-li shu-ch'ao*", with 'prefaces written by Ch'ien I-pen and Ku Hsien-ch'eng 顧憲成, the same Wu Liang from Wu-chin becomes the central figure, and, moreover, it is compiled with the help of the core of the Tung-lin faction members. It incorporates thematically the texts of memoranda from Wan-li 1 (1573) to Wan-li 42 (1614). Due to the fact that it contains memoranda in connection with Manchu-policies it was designated as a forbidden work during the Ch'ing 清-Dynasty, and there are only extremely few works handed down to us.

Wu Liang was related by marriage to Ch'ien I-pen, and was sharply opposed to the anti-Tung-lin faction, supporting Ku Hsien-ch'eng. Therefore one can say that also this book has been compiled according to the contemporary political doctrines of the Tung-lin faction. It mostly criticizes the political situation between the monarch and the cabinet, especially its oppression of freedom of speech, and parts relating to concrete local policies are rather rare. This problem also is related to the gentry-controversy of late, and hereafter one shall have to examine the contents of this book.

THE MEMORANDUM TO AMĪR KITBUGHĀ

SATŌ Tsugitaka

The Sulṭān Qalā'ūn (678/A.D. 1280-689/A. D. 1290), who raised the expedition army to Markab in the month Dhū al-Ḥijja of 679 23 march 1281) appointed as his vice-sultan amīr Zayn al-Dīn Kitbughā al-Manṣūri, and left a 'memorandum' (*tadhkira*) to him, in which he pointed out the policy for ruling Egypt. This is the so-called 'memorandum

to amīr Kitbughā'. This memorandum has been handed down in total in the annals of Ibn al-Furāt (d. 1405), and furthermore in part in a wanting form in the encyclopedia (*ṣubḥ*) of Qalqashandī (d. 1418). This paper tries to make clear the factual situation of Egyptian society under the Mamluk regime by first translating the complete text of the memorandum and subsequently annotating in as much detail as possible every paragraph.

In total 28 paragraphs are provided for, starting with problems of law and justice, the public peace and customs in Cairo and Fuṣṭāṭ, the digging of canals and the founding of irrigation dikes (*jīsr*), water maintenance policies such as repairance, the duties of regional governor-generals (*wālī*), the protection and control of commercial activities, problems of the *muqṭa'* and their representatives *wakīl*, policies against the Arab nomads ('*Urbān*) etc., thus many problems connected with state and society are dealt with.

Of course, one cannot presume that the provisions written in the memorandum have all been implemented, as it was only pointing out the policy bases. But it is also true that in the provisions the reality of Egypt during the early Mamluk Dynasty is reflected in various ways. For instance, the *wālī* did not only control and preserve the irrigation system, but he also wrote certificates (*ḥujja*) on the acquisitions of the *muqṭa'*, and had the duty of putting these in the custody of the *drwān*. Further, there was a distinction among the *muqṭa'* between the *al-muqṭa' al-aṣlī* and the *muqṭa' al-jiḥa*, whereby the latter was given land or in other cases the income of taxes. These are both facts which were not known previously in the study of the *iqṭā'* system.

ONE PROBLEM OF THE APPOINTMENT SYSTEM OF OFFICIALS (CHÜAN-HSÜAN) 銓選 IN THE SUNG 宋 DYNASTY —About the system of 'guarantor-recommendations'

UMEHARA Kaoru

The bureaucratic system of the Sung Dynasty seems at first glance extremely complicated, but one can say that it reached the highest level